意見 OPINION

瀬に流失したコンクリートブロックを撤去してほしい

田子 泰彦

富山県水産試験場 〒936-8536 富山県滑川市高塚364

Yasuhiko TAGO: Concrete blocks scattered in the riffle should be removed.

Ecol. Civil Eng. 7(1), 103-105, 2004.

Toyama Prefectural Research Institute, 364 Takatsuka, Namerikawa 936-8536,

Toyama, Japan

河川法の改正

平成9年には河川法が改正されて、河川の管理においては従来の治水、利水に加えて「環境」という要素が加味されることとなった。地元住民の理解と同意が得られれば、環境に重点をおいた従来では考えられなかった柔軟な河川管理が可能になり、その意味では、河川法の改正は画期的なできごとだったと理解している。本学会の前身である応用生態工学研究会が河川法の改正と同じ平成9年に設立されたのも、同じように時代の背景(要請)があったものと考えられる。

ところで、私は応用生態工学研究会の設立当初の頃から、本研究会の主旨に賛同して入会させていただき、その会誌を読んできた。しかし、その会誌の中の「河川環境」に関する分野においては、魚とかその他の生物などの生息環境に関しての論文や知見は多く掲載されているが、漁業という、人間が毎日行っている「就労環境」については全く触れられていないのが気がかりだった。

確かに、魚などをはじめとした動植物の生息環境と河川の形状・水質・流量といった項目を関連づけた研究は、人間にとっても極めて重要なことだと考えられる。しかし、それだけでは実際に河川で行われている人間の営みを反映していない、いや重要な部分が欠落していると私には思われた。そこで、長らく河川漁業の資源・生態の研究や遊漁・漁業に携わってきた私としては、漁業者・遊漁者になり代わって、その就業環境(物理的環境)として、瀬に放置されたままのコンクリートブロック

(Fig. 1, 2)の危険性について意見を述べさせていただくことにする。

瀬に流失したコンクリートブロックはいかに危険か

私は平成9年から富山県の神通川と庄川において、漁業としての立場からの河川環境(形状)を調べるべく、どれくらいの規模の淵がどれだけあるかを調べてきた(田子 2001)。調査方法は極めて原始的というか単純で、川漁師の操る川舟に乗って、長さの目印のついた竹竿と魚探を用いて上流から下流まで降り、水深を記録するというものである。実際に調査を行ってみると、北陸特有の急流河川である神通川と庄川では、少なくとも調査した間においては、淵の消長(河床の形状の変化)が激しいという知見が得られた(田子 2001)。

ここではその知見は置いておくこととして、実際の調査においての「危険」について触れてみたい。調査では瀬(早瀬)を降る時に最も危険が生じる。そこで調査中においては、危険と思われる何箇所かの瀬は舟を降りてロープで舟を支えながら歩いて瀬を降ることになる。しかし、瀬ごとに降りていては時間がかかりすぎるし、川漁師のプライドも許さないの、「危険だ」と思われた瀬以外は舟で降ることになる。これは調査でなくても、川漁師の日常の漁でもそうである。

それで、ある年の調査の、神通川の中流域(成子大橋付近)にある瀬を降った時のことである。瀬を降る前(Fig. 3)、トモ(舟尾部)と舳先の川漁師達は舟で降りるか歩いて降りるかを話した。そして、結局、「大丈夫だろう」ということで舟に乗って瀬を降ることになった。

Fig. 1. Concrete blocks scattered on gravel bars after floods in the Jinzu River.
神通川の河原に散乱・放置されたコンクリートブロック.

Fig. 2. Pieces of concrete blocks in the run.
平瀬に突き出たコンクリートブロックの一部.

瀬の半ばにさしかかった時である。舟の中央部に座っていた私は大きな衝撃とともに前方に 1 m ほど投げ出された。一瞬何が起きたのかよく分からなかったが、舟底が何か異様な物体に激突したのだと感じた。瀬を降りた淵で、川漁師からは「田子さん、大丈夫でしたか」と気遣われたが、その時は運がよかったのか、少なくとも体はなんともなかった。川漁師の説明によると、舟底が波に隠れていたコンクリートブロックにぶつかったのだという。瀬の上からではコンクリートブロックが見えず、水流は少しきついが河床は石だけだろうと判断したという。淵から上流の瀬を見上げると、上からは見えなかったその突き出たコンクリートブロックの塊が私にもはっきりと見えた (Fig. 4)。もし、舟が転覆あるいは私が瀬の中に投げ出されていれば、打ちどころによっては大怪我あ

Fig. 3. The riffle located at the mid-stream of the Jinzu River. Concrete blocks under waves are not visible from the upper reaches.
神通川の中流域にある早瀬。上流からでは瀬にブロックがあるかどうかは判断できない。

Fig. 4. Concrete blocks under waves are able to be found from the lower reaches. These blocks are quite dangerous for boats and fishermen, especially in the riffle. Concrete blocks scattered in the riffle should be removed immediately.

瀬の下流部から上流を見上げると、波に隠れているブロックが見える。これらのブロックは川舟や川で漁をしている人にとっては極めて危険である。せめて、早瀬に隠れているこのような危険極まりないブロックだけでも撤去できないものだろうか。

るいは最悪の場合、死もあったかもしれない。

FRP (強化プラスチック) 製の舟の底には大きな亀裂が入り、浸水してきた。調査をどうしようかということになったが、「別の日が組めない」という私の強い申し出に、気丈な川漁師達は舟の 1/3 程を水に浸りながらも (FRP 製の舟は沈まなかった)、最後まで調査をしてくれ

た。

実際、河川では常にこのような危険を背負って漁業が行われており、前述のような事故も時に起こりうる。川漁師達は時に舟を破損しては自分で修理し、また怪我をしては自分で治すことになる。また、事の中味は小さくなるが、私などもいったい何度、破損・流失したブロックに投網を掛けては、投網を破損し、あるいは回収不能に陥ったことだろうか。

平成 15 年に報道されただけでも、神通川では舟から投網を打っていた漁業者が 1 人死亡し、友釣りをしていた遊漁者 1 人が死亡し、1 人が重体となっている。漁業者の場合は、投網を打っていて何かの物体に投網が掛って川に落ちたらしい。私の友人はかつて庄川の中流域（南郷大橋付近）にある深みで泳いでいて、水制工のコンクリートブロックに吸い込まれる流れに身をとられブロックにぶつかり大怪我をしている。神通川でもかつて行われた筏下りの際に筏が護岸用？のブロックにぶつかり、人が亡くなる事故が起きている。水制工のように遠くから確認できるコンクリートブロックも、川で漁業や水遊びをしている人間や舟にとっては危険である。ましてや、川の中で見えないブロックや早瀬のように咄嗟には避けようがない場所にあるブロックにおいては、その危険度は極めて高い。

これが道路や海上だったら？

神通川の漁業権を管轄・行使している富山漁協が主催する「河川環境研究会」の席上、私は国土交通省の担当官に、瀬に流出したコンクリートブロックを撤去できないものかと、お願いしてみたことがある。担当官は現状では通常の河川管理費？でそういうことをすることはできないと答えられた。最近、水産関係者に極めて好意的な対応をなさるようになった国土交通省の担当官のニュアンスでは、技術的にも可能で、やってあげたいのもやまやまだが、現状では対処する予算（項目）がないという。

しかし、もし、これが道路ならどうであろう。以前、道路にあいた穴にオートバイが突っ込み転倒した事故があり、この時は道路管理者の管理責任が問われた。道路ならまず管理者の責任が問われるのではなからうか。まあ、道路は交通量が多いから川と一緒にするのはどうか、と言われるかもしれない。では、海ではどうか。海でも海岸管理者は危険な箇所にはブイ等の目印をつけるなり

するし、海上保安庁も船舶所有者に危険性を知らせるなどそれなりの対処をしているはずである。

では川では何故できないのか。川においても産業、つまり漁業が営まれている。生活に占める割合がどうあれ、夏場では日々川漁師達は川に出て漁を行っている。たとえ河川漁業が産業に占める割合が微々たるものであっても、川漁師たちが日々危険にさらされるのを無視するべきではない。河川漁業は河川工事にコンクリートブロックが使用されるはるか以前から、そこで途絶えることなく営まれてきたのである。

また、流出したコンクリートブロックをそのまま河川敷に無為に放置しておくのはもったいない。ブロック一つ製作するのも結構お金がかかるのではないのだろうか。そのブロックをまた水制工の一部として利用すればいいと思われる。

瀬に流失したコンクリートブロックの撤去を！

もちろん、私のように魚類の資源・生態の研究に携わる者としては大きな淵の構築といった魚などの生息環境の改善（本学会の多くの人がそう考えていると思うが）をやって頂けるのはうれしい。だが、それよりも、やはり「人の命」の方が優先する。淵に深く沈んだものやトロ瀬にゆるやかに突き出たものまでは、ここでは問わない。漁業者や遊漁者の安全のためには、舟が流れ下った時、あるいは人が流された時に衝突し、衝撃として大きな被害を及ぼしかねない、瀬に流出したコンクリートブロックを、是非、通常の河川管理（費）の中で、撤去できるようにしてほしい。

そして、さらに言わせてもらえるなら、護岸の補強や水制工として設置されているコンクリートブロックにおいても、人が流されてそれにぶつかる場合も想定して、より安全な形状なもの（天然の石のように表面が滑らかでより球状に近いもの）に変えてほしいと思う。あるいは水制工そのものを、たとえば蛇籠のように川の石を鉄線などで包んだものに変えてほしいと、心の底から願わずにはいられない。

引用文献

田子泰彦（2001）神通川と庄川の中流域における最近の淵の消長。水産増殖 49(3): 397-404.